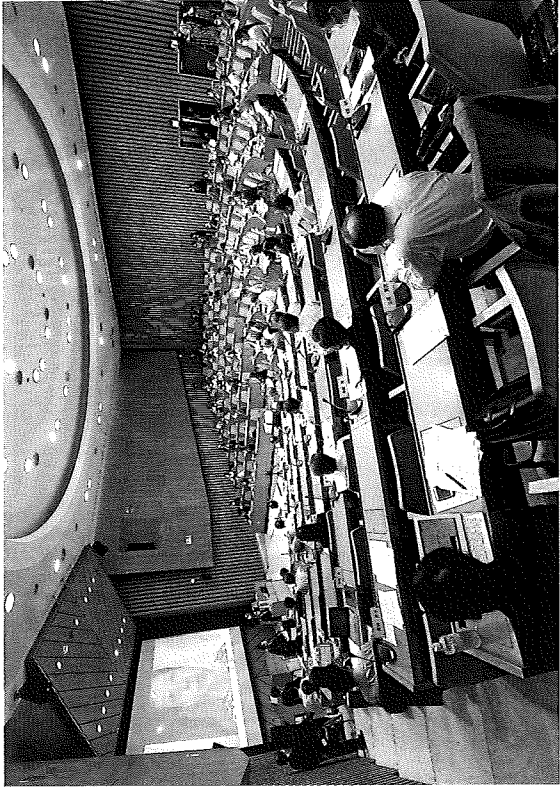


文化



東京都内で開かれた日本学術会議の総会（上）

小中高校の不自由

教育的任命拒否は、学問の自由への侵害である。これは、時間をかけて進め

まさに、十定で奥座敷までズグズグ入り込んで来た、と言いきるのが日本学術会議の新会長任命拒否だ。9月14日の新政権後の10月1日人事で、さっそく大きな波紋を呼ぶことになった。

山田 健太

時評

〈10月〉

てきた現場統制の過程にあるもの、ということに大きなポイントがある。

すでに、小中高校の教育分野において、1990年代以降、周到な準備と実行をもって、個々の教師の自由を奪い、政府主導の教育内容の徹底が実現している。一つは教科書の政府方針への統一である。そもそも制度上、日本の場合は教師が自分の教室で好きな教科書を使用できない仕組み

日本学術会議任命拒否

現場統制完成形へ 教育・研究の自由空洞化

となつている。それが、さらにこの間の採択の広域化と決定権限を持つ教育委員会メンバーの入れ替えによって、政府方針に近いとされる教科書の使用が大幅に進んだ（各学校がどの教科書を使うかは、地区ごとの教育委員会が決定する仕組みが採択制だ）。

しかも、教科書内容は文部省の意向に従うことが義務付けられており（教科書検定制度）、政府見解を披瀝することがルール化される結果、懸念婦女や国民層級、沖

着唱を行うことが儀礼化しているが、その際に立たないことは真気がいる事態を生んでいる。

大学の自治への侵害

これに比べれば大学はまだではある。個々の教員の研究の自由も教授の自由（授業を何卒どのように教えるかの自由）も、また見た目として確保されている。しかしその自由も実はここ数年で大きく侵食されている。それが美利優先の教育志向であり、大学補助金政策である。いわば、

国家政策に沿った学生を作ることを求めることで、大学教育を縛ってきたからだ。

思い返せば昨年は、文化・芸術分野に対する政府の直接介入が大きな問題として浮上した。文化庁補助金カットの問題はその後の導入し、政府の方針に合った教育内容の大学に傾斜配分されることになった。まさに財源を通しての政府の大学支配が進む形になっていることだ。

あるいは、学内の規律重奪している。今回の任命拒

否に真を唱える教員や大学においてすら、その学内に政治的主張をもった集会所開くことは困難だ。大学自体が、学内の平穏を維持するといった理屈で、自由な言論表現活動の身を厳しく摘んで来た結果でもある。

成功体験に裏打ち

さらにいえば、こうした教育現場における「改革の成功」のほかに、解釈変更は怖くない、という経緯も積んでいる。近いところで、集団的自衛権もそうだし、検察庁法・国家公務員法も当てはまる。表現分野で言えば、放送法の解釈変更もいとも簡単に成し遂げた。いまだに当該研究分野の研究者の大多数は政府解釈は間違っているというところか、新解釈に基づく政治家の振る舞いを、放送現場は抵抗なく受け入れる事態が定着してしまっている。

内閣人事局による官僚統制が成功したことは言うまでもない。これが前政権以来の力の源泉として機能しているし、むしろ今後、その完成度は高まっていくことになる。そしてこうした変化は、強いリーダーシップとして中間の高い支持を受けている。まさに過去

の解散や前例を踏襲する守旧派に向かって闘った「改革派」だからだ。これに力を貸している

が、世論の対立状況だろう。いわば国論を二分するような課題については、政権は親政権のメディアを最大限活用し、強行突破を繰り返してきているからだ。その結果、内閣支持率にも大きな影響を与えている。秘密保護法も国家安全保障法も、共謀罪も、みな同じ構図である。いわば、国論世論が割れた瞬間、政権は「勝った」という状況がある。

この勝利に裏打ちという悪習は、きちんと絶たせる必要がある。このように首相による恣意的な人事が当たり前に行われれば、いともたやすく憲法で保障されている、学問の自由や言論表現の自由が空洞化することは間違いない。社会全体をみるほどに、事態はより深刻化していることがわかる。こうした厳しい状況のなかで、10年先を見通して

節を通した議論を社会の中で構築していくのが、まさに研究者の役割であり、そのサポートをチャイナリクスにも期待したい。

（専修大学教授・言語学）  
（第21回掲載）

本欄の過去記事は本紙のウェブサイトのほか、「見張りの解散や前例を踏襲する守旧派」など、過去の「改革派」だからだ。これに力を貸している

「お話し」

屋 美樹

近代以前の城は堅固な城壁に守られた軍事的な防衛施設として造られ、為政者の拠点、政治の中核とい

歴史と表裏一体である。人々が生きた場所や時代によって、首里城の位置づけは異なるだろう。

頃であった。そんな時代に首里城は復帰20年記念事業として復元された。

か。私たちが何者であるかを規定するし、まことばで、今このテーマを議論することは重要な意義がある。

の瀬川志孝氏（大学非常勤講師）に加え、菅野文一氏の開発が一気に進む一方、街の風景は激変し、そ

琉球

潮の磯

限界を迎え、崩れ落ちる。互換から新間見える激憤、見えてく

陽炎のうちに消え、く前に突きつけ、小さな、悲愴に呑み込まれ、笑わせな

差し伸べた手、爪の垢

廃車、立ち並ぶ空を、ていない道を車で通り、が走り回り、年老いた

傷が走るほど美しい、降る

あんと 1997  
誌「煙火」。2018  
14回名桜大学學藝コン  
受賞。

◇第1、第2

新刊紹介

国土開発の影で街の風景は激変「五輪と五博」

（畑中喜彦著）

国家が近代化を成し遂げる過程で大きな役割を果たしてきた五輪や博覧会。国土の開発が一気に進む一方、街の風景は激変し、そ